

三澤勝衛における風土と自然への敬畏

角田 雅昭*

Katsue Misawa studied and revered Nature

Masaaki KAKUTA*

【要旨】

本論は、三澤勝衛における地域の風土と自然への敬畏についての研究である。三澤の地理学研究は、地域の自然に対する敬畏をもとに進められながらも、その表層を超越しようと試みるものだった。風土という三澤独自の概念枠組みは、三澤が自然の根源性へアプローチするためのものであり、かつローカルな知を構築するために必要なことだった。

キーワード：三澤勝衛，地理学，風土，自然，エマソン

1 はじめに

戦前の長野県で、小学校・中学校で地理科教員を務めていた三澤勝衛は、教育者であるとともに、120編を超える論文を発表する卓越した研究者でもあった¹。三澤は、1885（明治18）年、長野県更埴郡更府村（現在の長野市信更町）の農家に生まれ、高等小学校卒業後は、家業の農業を手伝いながら、1902（明治35）年に、更府尋常小学校代用教員になった。ここから三澤は、まず教育者として歩みはじめた。

三澤の最終学歴は、高等小学校卒である。その後、1915（大正4）年には、難関試験だった文部省師範学校中等学校高等女学校教員検定試験（通称：文検）に合格し、正式に地理科の教員となった。さらに、松本商業学校を経て、1920（大正9）年に長野県立諏訪中学校（現在：長野県立諏訪清陵高等学校）へ着任した。

研究者としての三澤の業績の多くは、この諏訪中

学校（諏訪清陵高校）時代のものである。三澤の地理教育・研究に関する膨大な記録は、諏訪清陵高等学校にある「三澤先生記念文庫」に保管・展示されている。三澤の地理学研究とその業績については、岡田の先行研究²などに詳しい。

地理科の教育者だったことから、三澤は一般的には、地理学研究者と論じられてきた³。ところが、興味深いことに、一部では気象学者と紹介されている⁴。事実、研究を始めた初期の頃、1923（大正12）年には、「諏訪の氷柱」という論文を発表していた。その他にも、当時まだ誰も長期継続観測をしていなかった太陽黒点の観測も行っていた。長期に亘ったこの研究のために、三澤は左目を失明している⁵。

このように三澤の研究は、地理科の教育者という立場を基盤としながらも、狭義の地理学にとどまることなく、多様な領域に及ぶものであった。しかし、

*かくた まさあき 相模女子大学学芸学部

彼の研究は、主に諏訪中学校を中心とした諏訪地域、及び長野県下を対象としたものだった。あくまで彼は、自らが生活する地域とその周辺を丹念に観察し分析する教育者であり、研究者だった。

三澤の研究には、他にも一定の傾向があると指摘するものもある。加藤⁶や宮坂⁷らによれば、三澤の研究は自然科学を中心としたものがほとんどであり、社会科学については、丁寧に避けられていたという。しかし三澤が繰り返し主張していたことは、自然科学でも社会科学でもなく、地域を探求することの重要性だった⁸。

実際に、地域の現場を調査すれば、そこには多様な要因が存在し、それらが複雑に織りなしている様態は、連綿と続いている。そのことを理解していた三澤の研究は、自然科学や社会科学といった枠組みでは、収まらない。このことについて、三澤自身も「植物を植物として観、動物を動物として観ているあいだは、それは植物学であり、動物学であって、まだそこにはなんらの地理学的萌芽さえも見出すことはできない。それと同様に、人類または人類社会を人類または人類社会として観ているだけでは人類学であり、社会学であって地理学でないこともまたいうまでもない⁹」と述べていた。彼が地理学を軸に、学問領域にとらわれず、総合的に地域を探求しようとしていたことは明らかである。

このように三澤の研究対象を再考してみると、それは地域の総体と言った方がふさわしい。つまり、地域の自然や文化、あるいは天文学的事象や地域の人々の信仰心なども含めて、真理への到達を模索していた。対象地域の真相に迫る多角的な研究となるように、彼が導入した独自の概念枠組みが、風土なのである。

三澤は、この地理学と風土について、「そもそも地理学は、私の持論からは、そこの風土、すなわちそこの大地の表面と大気の底面との接触からなるその接触面を中心に、その面の性質を研究することを使命としているのであるから、すでにその研究対象には面すなわち広がりをもっているわけである。それが『一つ』の対象である以上、その広がりは一つの統一をもった広がりであるべきことも当然である¹⁰」と説明している。すなわち、三澤の考えている風土とは、大気（風）と大地（土）との接触面であり、それらを統一的な広がりとして捉えるものともいえる。このことから、三澤がいわゆる日本の自然や世界の自然ではなく、地域の自然や文化を統

一的に捉えようとしていたことは明らかだろう。

彼が長く続けた太陽黒点の観測も、その現象の出現が及ぼす影響に関心があったと考えられる。彼は太陽黒点の変化の周期性と気候の係性を調べるために、源氏物語を読み、描かれていた服装から、平安時代が比較的温暖だったのではないかと想定していた¹¹。地域に見られる諸現象を丹念に調べるためには、できる限りのアプローチを試みていたことを示すエピソードである。

ところが、現代では、自然科学系と社会科学系を、別の枠組みとして捉えることが一般的である。しかも、その際、特段の理由がなければ、地域の特性を考慮することもほとんどない。現代に生きる我々は、意識して三澤の研究に取り組まなければ、そうした現代的な枠組みに惹き込まれてしまう恐れがある。

そのため、本論では、三澤勝衛が、風土という視座から、地域の自然の真理に迫り、ローカルな知の構築を目指していたことについて論究する。その際、彼自身の著述を、できるだけ当時の状況を加味しながら読み直すことで、三澤勝衛が語ろうとしていたことに近づくことを試みる。

2 三澤勝衛と地域の自然

2.1 善悪を超えている風土・自然

はじめに、彼が1936（昭和11）年に、長野県の砂防協会に招かれて行った講演録の著述からとりあげておく。「風土・自然に善悪はない」という題がつけられた文の一部になる。

今ここに土地の肥瘠とか反応とかいう話を例にとってその話を進めてきたのであるが、しかし、うっかりして、やせ地はいけなとか、酸性土壤は不良であるとか、そういったふうに簡単に考えてしまってはならないということである。

もともと、風土というものは大自然そのものである。自然には善悪はない。それを善とするのも悪とするのも、それはまったくわれわれ人類の心構えだけのものである。これはもっとも大切な、とくに今日お話の主題となっている「風土産業」の根本思想ともみべきものであるから、はっきりと申し上げておきたいと思う¹²。

ここからは、三澤独自の風土は自然そのものでもあり、その自然には本来善悪はなく、仮にそこに善悪が現れたとしても、それは私たちの「心構え」の

問題である、と述べていた。

2.2 自然への敬畏

それでは、自然に対する地域の人々の心構えとは具体的にどのようなことを三澤は指していたのだろうか。そのことを考えるうえで、参考になる箇所を、少し長いが見ておく。1937（昭和12）年に、長野県下伊那郡松尾町（現・飯田市松尾）で行った講演の筆記録である。

科学者以外の方がたの間には、不幸にして、その科学に対する認識の不徹底から「科学万能」というように考えておられる人たちが、またけっして少なくないようでございます。しかも、その科学なるものが、私ども人類の意欲の建設したものである結果、それがついには、「人間万能」というような思想を招来させまして、それに対して、さらにその人間の他の一方に、その人間の意欲を抜きにした大自然というものを、その対象として押し立て、言い換えますと、その大自然と人間とを対立させまして、かつては、私ども人類の驚異の対象であり、いや、敬畏のシンボルとさえ考えられておりました、その自然に対しまして、「自然征服」というような言葉を、いや、言葉だけならばまだしも、そういった思想までももたれるようになってきておりますことは、否定できない事実でございます。昨今、かの新聞に雑誌にあるいは大衆向きの、よく用いられております「征服」という言葉の乱用（？）は、まことにそれを実証いたしているかのように思われます。（中略）夏の休暇にちょっとそこらの高い山へ登ってきたからといって、「山岳征服」、それも命からがら登ったり飛んだりしておりながら、そういった言葉が、しかもきわめてむごうさに用いられるのが昨今の世相の特徴とさえ申したいほどであります¹³。

ここには、同時代における、人と科学のあり方とそれらが山や自然に及ぼしている影響に対して、三澤が批判している考えが二つ示されている。一つは、科学者以外の人々に広まっている「科学万能」という俗説である。もう一つは、その奢りから生じた「人間万能」という考えである。

本来は驚異（敬畏）の象徴だった自然を、征服対象ととらえるようになってしまったことを批判しているのである。もともと、人々は、自然に対して驚異（敬畏）の念を抱いていた。しかし地域の人々は、

自然の驚異を恐れつつも、その恵みに感謝しながら暮らしてきた。それゆえ、地域の人々にとって、大いなる自然は、善悪を超えた存在、まさに信仰の対象となっていたのである。

地域の自然を科学的に研究していた三澤であるが、実はこうした地域の人々の宗教的な自然観を尊重していたことが、ここから示唆される。さらに、この講演録には続きがある。

2.3 登山者と地域のあり方

講演を行っていた地域（下伊那郡）における御嶽山を山岳信仰の例として掲げながら、同時代に流行しはじめた登山について、三澤はつぎのように批判的に述べていた。

さいわい、ご当地の御嶽山は、今も昔もその霊山であることには変わりはありませんが、御嶽山だけではなく、あらゆるもろもろの山岳は、みな霊山であるはずであります。それへ登ってきたからといって、「征服」してきたというような考え方はどう考えてみても浅ましい考え方としか受け取られないのであります。なんとという敬虔の念の乏しい考え方ではないかと痛感されてならないのであります¹⁴。

この箇所からも、当時、西欧からもたらされた、登頂を目的とした登山に対して、三澤が違和感を抱いていたことがわかる。そのように山や自然を「征服」するかのような考え方を彼は浅ましいと述べていた。地域において崇められる山は、あくまで霊山であり、そこに込められた地域の敬畏の念や、時空の重みを、彼は尊重していた。

登山について三澤は、1936（昭和11）年に『山小屋』第56号に発表された、「南信地方の民家風景—とくに天竜川流域について—」という文でも、興味深い批判を行っている。単に批判するだけでなく、登山に対する考え方の見直しを迫っているのである。

最近における登山の旺盛さは改めていうまでもない。が、いったいそれら多数の登山者はなにを目あてに、なにを主目的に登山されているのだろうか、否、登山すべきであろうか。これはあまりにも根本的な問題のようではあるが、しかしけっして軽視すべき問題ではない。（中略）

私はだいたいそれを次のように考えているのである。われらが登山の根本的目的は、かの山岳に

対する強い大きな礼讃、かの崇厳無比の山霊に対する高く潔れた崇仰、その神聖への憧憬である。

（中略）かの山岳の魅力から誘導された、われら人類の一種の信仰的行動である。またそれだけではなくてはならないのであると解したい。したがって登山そのものは、立派な一つの参詣そのものと考えなければならないのである¹⁵。

ここで三澤は登山の目的を、山に対する礼賛、崇仰、憧憬であり、自ずと惹きつけられて誘導された、信仰的行動であると考えていた。そのため、登山は参詣でなければならないと考えていた。つまり、地域の人々が脈々と伝えてきた山への姿勢を尊重すべきであるというのである。

三澤は登山が変容してしまった原因を、同書の以下の文のように、文化であるとしていた。ここでいう文化とは、簡単にいえば日常の生活を便利にするものである。その例として、当時この地域にも開通していた鉄道¹⁶や、自動車¹⁷の普及を挙げていた。

一方でそのさいわいした文化が、ほかの一方では、今度は、不幸にも、われら人類の「日常の生活」を、あまりにも自然から遠ざけてしまった。こういった文化のもたらした二つの方面、すなわち、利害・功罪、幸・不幸が互いにあいまって、昨今の登山そのものを勃興させたのである。

だから、かつてはいわゆる神社仏閣への参詣より以上に満たされ得なかったわれわれの欲求が、否、それでほとんど満足でもあったその欲求が、さらにその範囲を広め規模を高めて、今日の登山という形式で現われたにすぎないのである。したがって、今もなお残っている、かの「御岳参り」とか「富士詣で」とかいう言葉は、否、その行事は、私には格別にも懐かしきかつ貴くさえ聞こえてならない¹⁸。

従来、地域の人々が自然に対する崇敬の念から続けられていた、「御岳参り」や「富士詣で」という山との関係性は、すでにこの頃には、過去のものになりつつあったことがわかる。それに加えて、地域が新しい登山者を受け入れるのかどうか、喫緊の課題となっていた。つぎにそのことが書かれた箇所を見ておきたい。

その山岳に対し登山という方面からは、山岳の

錐体部〔錐状の部分、ここでは山頂のこと〕を、さながらそれを、かの社寺の殿舎部と同視し、それへ続いた山麓部は神域であり、さらにその山麓へ続いた文化色をもったいわゆる農耕地帯をその前域とみ、そしてこれらの農耕地帯から山麓部を貫いてその錐体部へ達している溪谷およびそれに沿った登山道、これは明らかにその参道でなければならないと考えていることはあまりにも当然である。

この意味からいって、（中略）南信の山々に対しては一種の前域であり、かつ参道沿線の植栽や苑池〔庭と池〕にも等しい一つの風景でもあるはずである。かの参道ならびにその沿線の風致が、その寺社のいかんによってそれぞれの特色をもち、そこに参拝者の気分転換という大きな役割を果たしているがごとく、私が今ここに述べようとしている民家風景も、その登山者に対する気分転換の一助として、この文化地帯のもつその前域としての役割の、その万分の一なりとも描き出し得たならばと、念願しているのである¹⁹。

ここで三澤は、登山者と地域との、新たな関係性構築の方策として、地域の自然に対する敬畏の念を登山者と地域住民が共有することを構想していた²⁰。そのため、山頂を社寺における殿舎部と見なし、その頂点から接続している山麓については神域、さらに山頂へ続く溪谷及び、それに沿った登山道を、その社寺への参道と見立てることを提唱していた²¹。

2.4 理性による超自然性への到達

最後に、三澤が1934（昭和9）年に「風土性の考察に対する梅樹の効果」というタイトルで『地理学』に掲載された論文の一部を取り上げておく。三澤はそこで、エマソン（文中ではエマスン）の『自然論²²』を引用しつつ、科学や倫理・道徳といった理性に依拠して現象把握することの意義をつぎのように論じている。

もともと、ものの真相を究めんとしている科学にしても、あるいは倫理や道徳にしてもすべてそれらの立場からは、じつはその直面している現象そのものは、その真相把握への一つの先型として考えるのが当然ではあるまいか。「理性はものの輪郭と表面とを通して、すなわち透明にして、原因と霊とのみを見る」といったエマスンの言葉はまことに味わうべきである。まして、とくに風土

性（地域性）をその究明の対象と考えるところに真の地理学の存在があり、かつしかるところに初めて地理学の科学としての独立性を認め得るとさえ考えている筆者においては、まずその植物なり動物なりあるいは人類なりを通して、その風土性を考察すべく、すなわちそれを風土そのものに純化すべく、それへの一種の風土計にも相当するものを考究することは、またまことに当然な用意でもある²³。

三澤は、私たちの目に映る現象そのものは真相へ到達するための先型であり、科学あるいは倫理・道徳のような理性による思索は、自然との結合を緩め、現象を俯瞰して眺められるようにするものと考えていた。おそらく、ここで論じる科学に、三澤は風土性を伴う地理学を含めていたであろう。つまり、三澤独自の地理学的視座により、表面的な自然の奥に備えられている根源性（causes：原因）や超自然性（spirits：魂）に到達することも可能であると論じていた。

3 考察

まず、三澤は、自然そのものには、本来善悪はない、それを論じるとすれば、その元は人間の心構えであると述べていた。その自然に対する具体的な心構えの一つが、自然への畏敬の念であった。地域の人々は、その地の自然の驚異を恐れながらも、もたらされる恵みに感謝しつつ綿々と暮らしてきていた。そこに自ずと立ち上がってきたのが、その地の山岳信仰である。ただし、そのままの心構えでは、自然に左右（決定）されるだけであることに、三澤も気づいていた。この問題については、後ほど触れたい。

三澤は、当時流行していた登頂を目的とする登山については、自然への敬畏の念を失していることから批判的だった。その背景には文化の利便性が都市部の人々を自然から遠ざけたことを挙げていた。しかしその反面、文化によってもたらされた鉄道や自動車などの地域への恩恵にも配慮していた。

このように三澤は、文化のもたらす両義性をそのまま取り込み、山や自然に対する地域の崇敬の念を、登山者にも共有してもらい、地域の人々にはその景観を再評価することにより、登山者と地域の新たな関係構築を提唱していた。興味深いのは、山麓部のうちでも、地域の人々が生活を営む農耕地帯を、登

山者の視点から見直したところである。つまり、地域住民の農耕地帯とその周囲に広がる池や林について、社寺の前に広がる庭と池と見立てていたのである。あたかも、現代における観光地化した有名社寺の池泉回遊式庭園と、その畔に立つ侘びた東屋をイメージしているかのようである。三澤は、登山のあり方については見直すべき点を指摘しつつも、地域外からの新しい登山者を受け入れるための現実的な折衷点を提示していた。

この登山の例が示すように、三澤は、地域の人々の自然に対する心構え、すなわち敬畏の念や山岳信仰を尊重していた。しかし、それをそのまま受け入れたり、取り込まれたりするのではなく、当時の時代性のなかで、俯瞰的な位置から多様な価値観の存立を模索しようとしていたのである。自然への敬畏と感謝の念を失することなく、自然を活かしていくように人々を導こうとしていた。ここに、自然に左右されるだけではない、三澤の独自の自然観が伺える。

彼が風土という独自の地理学的視座を用いて、自然を捉えようとしていた理由は、ここにある。三澤は、エマソンの『自然論』に、自身の地理学的探求と同様の姿勢を感得していたと思われる。すなわち、ただ表面的な観察ではなく、理性（風土を含んだ地理学）により、表層の内奥に存する、自然の根源性、すなわち善悪を超越し、ローカルな特性を有しつつ、地域内外を問わずに共有できる知の創造をめざしていた。いわば、風土という彼独自の視座は、自然への畏敬の念を尊重しつつ、地域の今後のあり方を構想するためには必要だったのである。

4 結論

本論では、地理科教員でありながら、地理学研究で三澤勝衛における風土と、自然への畏怖について、彼自身の著述から論究してきた。その結果、自然の根源性へ至るために、三澤独自の風土という概念枠組みが必要であると考えていたことが示された。

そもそも、自然は善悪を超越しており、そうした自然への敬畏が、鉄道等の文化に浸されるなかで、都市部の人々から消失しつつある。それがさらに山岳信仰や自然への敬畏を省みることのない、登頂目的の登山の流行に結びついていた。それに対して三澤は地域の山岳信仰を快復しつつ近代登山との折り合いを提案していた。すなわち、自然への敬畏を登山者と共有するとともに、地域の人々にその景観の再評価を促し、霊山を擁する地域と登山者との新たな

な関係性構築を提唱していた。

三澤の時代から 80 年以上経た現代社会において山岳信仰などは、ますます遠のいている。そのため三澤が同時代に構想したときと、現代とは状況も人々の考え方も異なってしまっている。むしろ、三澤が、風土という概念枠組みによって、人々が地域の自然を活かすための道筋を示していたことに着目すべきだろう。

グローバルな価値を一方的に地域にあてはめるのではなく、ローカルな視点から地域とその自然の多様性を再認識することこそ、三澤が示した現代にも通じる問題提起であろう。そして、地域独自の自然を、地域の人々と発見して新たな知を創造していくことが、三澤勝衛の著述から、現代に生きるわたしたちに課せられた課題なのである。

なお、自然の根源性に至ったあとに、三澤が試みていた、自然との新たな向き合い方と、その研究については、紙幅の関係で論究できなかった。これについては、他日を期したい。

註

- ¹ 宮坂広作 1990『風土の教育力—三澤勝衛の遺産に学ぶ』大明堂, p. 23, あるいは、加藤憲一 2012 三澤勝衛の授業実践をめぐる一試論：実践史における意義をめぐって、『信濃 [第3次]』vol. 64, No. 9, p. 704, など。
- ² 岡田俊裕 1989 三澤勝衛の地理学研究：その変遷と日本の地理学、『地理科学』44(1), pp. 17-34.
- ³ 膨大な文献にのぼるため、その一部をあげると、岡田俊裕 1989 三澤勝衛の地理学研究：その変遷と日本の地理学、『地理科学』44(1), pp. 17-34, あるいは、松野修 1996 三澤勝衛における科学的地理学教育の形成過程、『名古屋大学教育学部紀要 教育学科』43(2), pp. 115-128, または、松崎康弘 1999 三澤勝衛における「綜合体」概念と地理教育論、『教育学研究集録』(23), pp. 85-95, 加藤憲一 2007 三澤勝衛の地理教育実践とその特質、『学校教育研究』vol. 22, pp. 134-149, など。
- ⁴ 小林惟司 1995『寺田寅彦の生涯』東京図書, p. 59, なお、同書, p. 343, には、「地理学の三澤勝衛」とも記述されている。
- ⁵ 宮坂, 前掲書, p. 23.
- ⁶ 加藤憲一 2007 三澤勝衛の地理教育実践とその特質、『学校教育研究』vol. 22, p. 134.
- ⁷ 宮坂, 前掲書, p. 112.

- ⁸ 三澤勝衛 2009『三澤勝衛著作集 風土の発見と創造 <2> 地域からの教育創造』農山漁村文化協会, pp. 69-207, など。
- ⁹ 三澤勝衛 2009『三澤勝衛著作集 風土の発見と創造 <4> 暮らしと景観 / 三澤「風土学」私はこう読む』農山漁村文化協会, pp. 149, なお、元は 1934 (昭和 9) 年に『地理学』第二巻第五号に掲載された、「風土性の考察に対する梅樹の効果」である。
- ¹⁰ 三澤勝衛 2009『三澤勝衛著作集 風土の発見と創造 <2> 地域からの教育創造』農山漁村文化協会, p. 208.
- ¹¹ 牛山惣一, 五味一明, 小口英次ほか 1966 座談 三澤先生の授業をめぐって、『信濃教育』(962), p. 80, 主に小口と五味が、三澤が源氏物語を読んでいたことについて、対談の中で語り合っている。
- ¹² 三澤勝衛 2008『三澤勝衛著作集 風土の発見と創造 <3> 風土産業』農山漁村文化協会, p. 173.
- ¹³ 同書, pp. 103-104.
- ¹⁴ 同書, pp. 104.
- ¹⁵ 三澤勝衛 2009『三澤勝衛著作集 風土の発見と創造 <4> 暮らしと景観 / 三澤「風土学」私はこう読む』農山漁村文化協会, pp. 93-94.
- ¹⁶ JR 飯田線 (当時は伊那電気鉄道) が全線開通した 1937 (昭和 12) 年, 8 月 20 日に松尾町 (現・飯田市松尾) で行われた講演である。なお『山小屋』への掲載は、前年の 1936 (昭和 11) 年である。
- ¹⁷ 1934 (昭和 9) 年に、東京から塩尻まで御坂峠経由で国道が開通した。自動車の量産は、1925 (大正 14) 年に、フォード・モーターの横浜工場で開始されていた。
- ¹⁸ 同書, pp. 94-95.
- ¹⁹ 同書, p. 95.
- ²⁰ 同書, p. 114, なお、地域の民家は当地の自然の影響を強く深く受けており、それゆえに大きな調和となつて、一つの美しい風景であると同時に、登山の参道としての意義も十分成り立つということを主張することが本文起稿の目的であると、三澤自身が述べていた。
- ²¹ この点に関して、宮坂広作 1990『風土の教育力—三澤勝衛の遺産に学ぶ』大明堂, pp. 101-103, では、山岳を含む地理的景観を、平地における神社の社域と見立てるアナロジーと解釈しており、そのうえで、「三沢 (ママ) の登山

観は、たしかにいかにも古風である。だからこそ、彼は一般の近代主義的科学観のもち主ではなかったといえるのである」と三澤を批判的に論じている。しかし、そもそも三澤の科学観自体が地域に根ざしたものであることから、当時の下伊那郡において生じていたであろう、地域住民と外部から来訪した登山者との関係性の構築を目的とした一文と素直に読む方が適切と考える。なお、宮坂は、山岳を神社のみに見立てているが、三澤は社寺として神社や寺院を特定はしていない。この相違は、存外大きいと思われる。あくまで三澤は、山とその自然に対する

宗教性を尊重していたと考えられる。

²² エマソン、片上伸訳 1933『自然論』岩波文庫, p. 53, (= Emerson, R. W. 1836 "Nature", Gilman, W. H., Selected Writings of Ralph Waldo Emerson, Signet Classics., p. 207.), なお、クエーカー教徒であるエマソンが用いた「魂 (= spirits)」を、三澤が、どのように理解していたのかは、示されていない。そのため本論では超自然性と解釈した。

²³ 三澤勝衛 2009『三澤勝衛著作集 風土の発見と創造〈4〉暮らしと景観/三澤「風土学」私はこう読む』農山漁村文化協会, pp. 150-151.